

## 《座談会》

# 同志社の精神と未来

出席者——(ABC順)

林 以知郎 (大学文学部専任講師)

伊藤 彌彦 (大学法学部教授)

近藤 十郎 (女子大学助教授)

高野 頌 (大学工学部専任講師)

高山 修 (女子大学教授)

——司会——

竹中正夫 (大学神学部教授)

## はじめに

竹中 きょうは、同志社精神と未来というテーマで話しあうわけですが、比較のお若い方々に来ていただいたことは、私はいへんありがたいと思っています。

「精神と未来」とか、精神とか伝統というようなことになりますと、どうも後ろ向きになることがありますけれども、できればそういう精神や伝統を生かして未来にというような点が出てくればと思います。

それから二番目のことは、大学の『広報』なんかで田辺について書いていらっしやるのを、だいたい目を通したのですけれども、非常にはば色の、今から百年ぐらいあとになって田辺はこうなっているというような、浦島が帰ってきたようなお話が出ていますが、そういうことも結構ですが、暫定目標といえますか、こんなことは考えて次の一五年ぐらいを考えるべきだというようなこと、そして教育理念ですね。理念をどう生かすか、暫定目標をどう設定するかというようなことが話し合われればいいのじゃないだろうかと思いません。

それと重なりますけれども、田辺に向かう姿勢といえますか、こういう歴史的な段階で田辺校地を考えるということは、同志社人にとってはどういう意味があるか。困難はいろいろありますけれども、そんなことについてお話ができたらと思います。

それから、やはりイメージというのは、現代のコミュニケーションの時代において非常に重要だと思いついて、田辺に行ったときにイメージはどうなるか。雰囲気といつてもいいでしょうが、そういうものについていろいろ考えておられることがありましたら、お話しただけならと思います。自然にキャンパスの雰囲気なんて出てくるものでしょうけれども、ある程度の配慮や計画性が必要と思うのです。

一番大切なことは、新島精神とか立学精神が、これからの国際化の時代にどういうふうにならされるか。総合大学の総合性を生かすつつ、人間教育の焦点をどういうふうにしつつ教育をするのか、キリスト教主義に根ざしたりベラル・アーツ・カレッジの課題をとらえなおすことになると思います。これから移り変ってゆくについてはだれも予測しえな

いんですけれども、そういうなかで同志社の未来をどういう風にとらえるか、思いは際限なく広がってゆきますが先づ身近かなところから出発したいと思います。

#### 身近なところから

いま具体的に接している学生なり研究集団なりではどういうような、いい意味では秘められた可能性があり、悪い意味では問題点をもっているかというようなことは、出発点にいいかもしれませんね。実際に皆さん方がそれぞれのご研究や、教育に携わっておられて、感じておられることから話してみたらどうでしょうか。

伊藤先生は法学部で、ご担当は何でしたかね。

伊藤 主に日本政治史をやり、他に一般教養の政治学を担当しております。

竹中 そしたらかなり広く学生に接触していらっしやいますね。

伊藤 そうですね。文学部から工学部まで……。このごろの学生はほんとにおとなしくなっちゃって、すなおといえばすなおなんですしょうけど保守的で、雰囲気が変わってきた

という気がしますけれども。

竹中 ぼくも一般教養で宗教学をやっています。一つですから小さい経験ですけど、しかし学生の質がかなり同質化していることを感じますね。答案を見ていても、同じような傾向と同質的なものがある。ということは、かなりある程度の学生が集まっているなど。昔はもつとヴァラエティーがありましたな。だから逆にいえば、エンジンかけたらこれはなかなかおもしろい教育ができるんだと思います。しかしなかなかエンジンがまだかかっておらん、そんな感じがします。

林 先日、学外から囑託で語学を教えてくださいださっている先生とお話したんですけども、非常に均質性が著しくなってきたようにおっしゃっていた。均質でないというのは、つまり大粒の学生がそろっていたということ、いままで関西の大手の私学に比べて同志社の一つの魅力だったと外から見えてきたさっていた。ところが、ここ二、三年学生の間、均質的なものを感じる。そして、それに結びつけて田辺の点をおっしゃっていたのですが、それはどういふことかという、大粒の学生が集まっていたのは出身地が全国的

に散らばっていたからで、そのことが、同志社が受け入れている学生の一つの性格をつくり上げているように思うと言ってらしたんです。それはやはり京都という場所がもっている一種の誘引力みたいなものがあつたのでしよう。ところがそれが田辺と京都にまたがる形の同志社になると、さてこの均質性というのがどういふふうに強くなっていくのか、弱まっていくのか、非常に注目しているとおっしゃってたんですけれど。

**高野** 私は専門しか教えておりませんが、対象になる学生さんは少ないのですが、最近の工学部の傾向を見ますと非常に入試がむづかしくなっておりまして、総体的にはいい学生さんが入ってきているだろうと予想されます。しかし、実際に接したかぎりにおいて感じることは、自分自身の考え方を自分でコントロールできないというのか、悪くるといけないのですが、先ほどの均質性の問題とかわっていると思うのですけども、自分の考え方を前面に出せないのですね。それは表現力がないことによるのか、あるいはそういうフィロソフィー自体を彼ら自身もってないのか、そのへんはちょっと判断がつきません

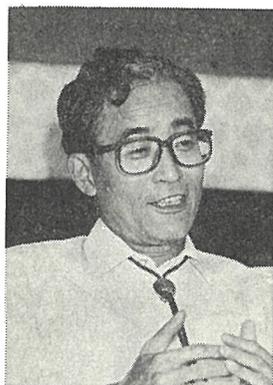
が、少なくとも自分で何かを主張し、自分で何かを実際にやっていくという気力に欠けているという印象を私はもっております。ですから能力とかいうことは別にして俗な言葉でいえば価値観が多様化している、あるいはイメージの世界だということより、むしろ論理性そのものがないのじゃないかという感じを私はもっているわけです。

**高山** いま均質性という話と多様化という話が出てきましたけれども、確かに教室で見るとかぎり学生は非常におとなしくなつたし、自分の意見をつよく主張するというのは少なくなつてきた。しかし教室外で学生の話聞いていますと、個々の学生の生活そのものは以前よりも多様化していることがわかります。この点では昔の学生生活とは非常に変わってきているように思います。われわれが勉強せなにかんと言つても、学生としては、ほかにこういふことも、ああいふこともしているんだという具合に、学生の生活のなかで授業が占める部分が小さくなってきているように思われます。われわれとしては不満もありますけれども、学生は学生なりに均等な部分と同時に、一人ひとり多様なものをもつて

いるのじゃないか。コンパなんかで聞きますと非常にユニークな過ごし方をしている、それなりに自分の考え方も持っている。だから均質性と多様性がかみ合っているような、新しい形の学生生活が生まれつつあるように感じるのですけどね。

**竹中** 同志社でもクラブ活動花盛りという感じで、とくに新町なんか行きますと大変な数の広告が出ていますし、学生たちの相当多くの時間は真剣にクラブ活動で楽しんでおり、そこでかなり先輩に鍛えられたり、他の学部の人に接する。あそこでは男女共学ですし、大学も女子大も相互に乗り入れて、かなり個性も発揮してやっているような感じはしますな。

**近藤** 高山先生がおっしゃったように、いまの学生は器用ですね。私たちとそれほど年代的にいまの学生は離れてないと思うのですけれども、うまく時間を使い分けて、いろんな自分の可能性を伸ばす、その伸ばし方をよく知っているような気がしますね。そういうものが教室の中では確かに出てこないのだけれども、私なんか仕事の関係で教室以外の学生を見る機会が多い。しかも専門の立場を離



高山 修氏

れて学生とおつき合いをする場合が多いのですが、そういうところから学生を見てみると、自分の特性を生かすのが積極的な意味では上手ですね。たとえば女子大の場合には、修養会をするとか、夏のキャンプに百人単位の学生を連れて行くということになると、やはり今の若者らしいところはあるのだけれども、何か一つのを熱心に追求しようとする姿勢は非常に強いんじゃないかと思えます。ですから案外失望したものでないんじゃないかなと思っております。

### 大学のサファリ化

伊藤 学生が大学において、授業をどれくらい重視するかという比重は下がってきている。しかし全生活で見ると充実はしていて、

そう形骸化はしていないんだということなんですよ。ある学生が、大学という所は自然動物園みたいだ、サファリみたいだと言っていますね。まったく放し飼いで自由であるかのように思うけれども、ときどき試験がある。いざとなれば食べ物は補給してもらおう。管理されてないようで、ぎりぎりのところでやはり管理されているのでちよっとおもしろいと思っただけでも、そういうふうなことで、ある意味で精神生活を充足させながら四年間暮らしているのでしょうけれどもね。しかし、政治学科のようにしかと専門知識はこれだけだ、というふうな目標設定もできない教養型学科の場合ですと、目的なき学生集団に対して、どうして勉強させるかみたいなことをぼやいているという日常生活が続くことはあると思います。一般教養の試験答案なんか見ますと、あらかじめ問題を予告しておいた場合でも、それと全く無関係に「私はこれについて書きます」とか言って、浅薄な知識をどこかから仕入れてきて、書くだけで、これで六〇点もえらさるだろう式の答案が少し増えてきました。おそらく授業には出席していなかったわけで、さりとて応用力もな

いので一夜漬けの記憶に頼ることになる。彼の人生における一般教養の授業の比重というのは、その程度なのかもしれないとガツカリもしますけどね。

林 いま、うちの学生たちが授業だとか自分自身の学習に意義を見出す割合は二割ぐらいかなと思っておりますが、だけど同時に言えることは、大学生であるという身分に対する心理的な依存度はむしろ強いものがあると思うのです。だから一般教養で「こう書きます」というのも、ある意味で一種の甘えの構造かもしれないけれども、つれづれのままだに書いて、それを聞いてほしいという心理的な依存みないなものが強いんじゃないか思うのです。

### 京都のイメージ

だから奇妙なんですよ。具体的なかかわり、関心、意義を見出す割合は減っているのに、全体的な心理的依存度は高くなっている。そんな感じがするのですけれども。

竹中 もう一つ、私はキャンパスにいて感ずるのは、御所があるということとで救われていますが、しかしほんとにいま、バイクの林



林 以知郎氏

の間を歩いているという感じですが。キャンパスがだんだんそういう点では狭隘化し、せせこましくなってきました。外国の例を引けばきりがありませんが、いまの同志社では学園という雰囲気は少なくなってきました。そういう点は学生生活にも影響している点があるのかなあと思います。

新島襄ははじめ大阪に建てようと思ったわけですけども、結局キリスト教主義の学校では、大阪府の方で許可がむづかしいということで、山本寛馬との不思議な出会いもあって京都にきたわけですが、今から見ると京都に同志社があるということが、同志社にとっては非常にありがたいことであつたと思えます。学生の中でもわりあい多くが京都で勉強したいという京都のイメージというものが同

志社と結びついてあると思います。こんど田辺の土地に移っても、あそこも京都府の一角ですから、あまり田辺と言わずに、京都南学舎とか、京都のイメージを生かして呼ぶようにしてはどうでしょうか。

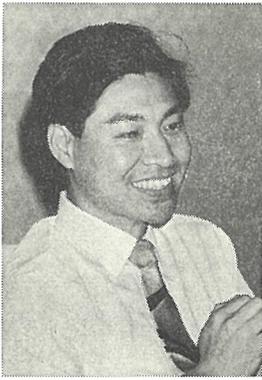
伊藤 今は京都の街のおもしろさがすぐ門の外にあるわけでしょう。ですから授業に熱中する度合いは二割としても、相当街が教育するような面がありますが、田辺に行きますと、いま先生がおっしゃったような外国の大學式に隔離されたキャンパスで時間を過ごしますから、その中で学生を充足させる工夫が大切になると思います。

近藤 京都が同志社の学生を教育する伝統というか、そういうものはあつたと思うのですね。ですから田辺ということを考える場合には、いままでの環境条件からは少し離れるけれども、田辺にしかない、あるいはこれから創造的なキャンパスができて、そこで学生の二割しか教室への依存度がなかったものを、少しでも広げていく努力はこれからどうしても必要だと思えますね。京都の街が学生を育ててきたというメリットは非常に大きいけれども、それがまた教室に対する依存

度を二割に減じ去ってしまったというデメリットもあつたのじゃないかというふうな感じがするのですけどね。

確かに今の学生はフリーリングでできますから、同志社に来るよりも京都に来ると印象が大きいんじゃないでしょうか。それを乗り切っていかなければ、これからの二世紀の教育はないのじゃないかという感じがしますけどね。

林 ばく自身の経験でお話するのも何ですが、ぼくは中学時代は同志社香里で育つてますから、いわゆる京都の同志社じゃないわけです。きょうの話とひっかけて言いますと、子供なりにその当でも京都の同志社の伝統というのを強く意識はしていたと思うのですけれども、しかしその伝統意識は、京都の同志社と同質のものを自分たちの中に見出すとしていたかという、今から振り返ってみるとそうじゃなかったように思うのです。自分たちは「香里の丘」という言葉に非常に愛着をもっていましたけれども、その場所に対する愛着なり帰属意識というものがあつて、伝統というのは、こういった自分たちの場所に対する愛着から出てくる独特の雰



高野 頌氏

気とか手触りとか、そういうもので形をとってくるものだと思います。確かにそういう形で出てきたものは、京都にある同志社と必ずしも同質でなくて異質のものかもしれないけれども、新しい場所が異質なものをつくり出していった、それはそれでいいのじゃないかと思うのです。

つまり、伝統というものが同質のものばかりつくり出すのだったらそれは発展していかないわけでしょう。田辺なら田辺という土地が、そこで二年間経過する学生たちにとって愛着をもてる所となつて、独特の肌触りとか雰囲気を形成するような所になれば、それがある意味で少し異質なものであつても、全体としてはこれからの同志社に、新しい雰囲気なり個性を注ぎこんでいくのじゃないかと思

うのです。京都の同志社をそのまま田辺に移行していく、あるいは植えかえるという発想は、あまりよろしくないのじゃないかと思うのですが。

### 新しい伝統をつくるもの

高野 新島先生が最初に京都のこの地に理化学校をつくられたのは、非常に画期的なことじゃなかったかと思えますね。一つの仮定ですけども、あの学校がずっと続いていれば、今の同志社は工学部あるいは自然科学の研究のメッカになっていただろうと予想されますね。しかし実際には途中でやめられて、そして新制大学になるときに工学部を入れるか入れないかという議論がかなりなされたと聞きますけれども、少なくともそういう事実経過がだいじであつて、具体的に同志社人がその時点時点でどういう判断を下してきたかということが、私は伝統を形成しているものだと思つてます。したがって一〇年先の未来を考えてみても予想もつきませんが、たとえばいまの延長上に何かあるとすれば、われわれ教職員判断が次の新しい伝統をつくっていくだろうと思つてます。

ですから、先ほどの議論の中には二つの側面があつて、一つは学生さんを勉強さすかどうかという問題、つまり教育に対する価値観の問題と、それからもう一つは大学の教員自体がどのような教育システムを考えているのかという問題としてわけて考える必要があるのではないでしょうか。教育システムという点から工学部の例を考えますと、これは積み重ねの学問ですから、基礎がわからなければ次のステップに行けないということがあります。最近工学部内で問題になっているのは、非常に留年率が高い。大学へ入ったら大いに青春を謳歌したいということで、一、二年生がどうも勉強しない。一年サボると一年必ず留年することになっていますので、勉強させるかさせないか——させるという表現はおかしいけれども、そういう問題があります。しかしこれは、いわゆる同志社の伝統をいかに継続して、教育、研究、学問というものをどういうふうにもつていくかという問題とは、まったく別個ではないかと考えるのですね。

ご異論があるかもわかりませんが……。

竹中 両方を考えんといかんでしょうね。そして両方関連していますね。同志社の伝統



伊藤 彌彦氏

の中に、精神性だけじゃなくてやはり理性的にもしっかり勉強する学生をつくるという知育の面があります。この学校をつくるときに、宣教師は精神的なキリスト教を伝道する学校にしたらいと言ったのに対して、新島はそれではいかん、どうしても知識のあるところの人間教育をやらんといかんと言われた。そういう点ではいまおっしゃった二つの点はだいい点だと思えますね。

**高野** 新島襄が、土農工商という身分制度があった時代に工がだいいだというふうな主張をしたこと、これはまったく世の中一般のイメージとはちがっていたと思うのですよ。そのなかでそういうものをつくられたという事実が、少なくとも同志社の伝統であるだろうというふうには私に思えますね。だから田辺

というものをそういうふうには考えますと、それは一つの同志社の新しい伝統をつくり出す空間が用意されているのであって、それをどういうふうに生かしていくかというのは、今後の構成員のいろんな具体的な問題に対する判断によるものだと私は思えますね。

極言しますと、たとえば大学紛争に対して同志社はどういうふうに対処したか。それからもったさかのぼって戦争時代に同志社はどういうふうに対応したかというふうなことが、少なくとも今を語る、あるいは未来を語るときに、だいいな一つの経過事実を同志社は内在していると思えます。

**竹中** たしかに歴史的な過程にあって、どういう決断を同志社人がしていったかということが大切になってくると思えます。

**高野** それが非常に大切なことじゃないかと思うのですね。

**竹中** 確かに相当先駆者的な考え方でハリス理化学校（明治二四年）と看病婦学校と同志社病院（明治二〇年）がいち早くつくられます。あの三つがもしもずっと続いてたら、同志社という学校はほんとに総合的な大学とてかなりの学者を出し、かなり有力な卒業

生を出していたと思います。それがあそこで中断されたということは、同志社の歴史においてはものすごく残念なことだったですね。一つは新島さんが亡くなったということと、それから国家主義的な傾向が強くなって、キリスト教主義の私立大学というものに対する風当たりが強くなり、外国からの独立を同志社が宣言したがゆえに経済的支持が少なくなりました。いろんな理由はあるけれども、そこをもう少しはっきりと検討して、こうだったということを押さえていかなきゃいかんと思えます。そうしないと同じようなことがずるずるとくりかえしてしまふ。

#### 田辺に向けて

あれだけ熾烈におきた大学の紛争のなかで問題提起がなされて、そのあと同志社の大学のほうでいうとどれだけ変わったかということですね。あまり変わらなかった。もちろん変わった面はいろいろあります。一つだけ顕著にいえるのは、一般教養の中に総合科目が生まれたことですね。大学の場合、新しく一、二年生を田辺へ移すという場合も、学際的な傾向が強くなって移るのか、あるいは弱



近藤十郎氏

くなくて移るのか、そのへんがだいたいじな問題じゃないだろうかと思いますがね。

高山 移る方向でわれわれ進んでいますが、移るに際して何ができるか、何をなすべきかということが問題だと思っております。私はかなり具体的に移転問題にかかわっておりますが、ここで文部省の設置基準がどうのこうのとと数字を挙げることは止めます。けれども、先ほど竹中先生がおっしゃったように近くに御所があるということで今出川校地は救われているといえますが、やはり同社社そのもののキャンパスが狭隘であるということが現実にあると思うのです。女子大学が田辺問題を進めてきたのも、結局、校地問題という具体的な問題から出発して、田辺移転を決めたわけですね。先ほどから伝統の問題が出てい

ますが、女子大学でもさんざんそれは議論をいたしましたし、今でも今出川校地に対する執着とか愛着は非常に強いし、私自身もそれはあるわけです。しかし教育環境ということを考えれば、やはりここは狭い。狭い広いというのは相対的なものですから、数字を挙げればいろいろ反論も出てまいります。田辺に行けば同社社の伝統が失われるという意見があります。伝統というのはつねに新しいものを生み出す力をもっているものですが、われわれが伝統と思いながら因習化している部分があります。因習という言葉と伝統という言葉を分けて考えれば、この際因習は捨てるなり改造して、同社社の伝統を考に生かすという状況をつくってあげたいと思います。このことのために田辺移転を活かさなければ、田辺移転は同社社にとってマイナスになるのではないかと。

竹中 そのためにはどのようなことが考えられるのでしょうか。

高山 関西では教養と専門を分けてやっているというの、今のところほとんどないわけですね。関東にはそれが多く。東大にしても慶応にしても、かなり古くから二つに分か

れている。移転問題ととりくんでいて、現在のように、いっしょにあるのが正常なんだという考えに固執するかぎり、やはり非常事態のことをやるのだという考えになるわけですね。ですから新しい形の大学にこの際つきかえるのだという気持ちにならなければ、いい田辺移転はできないのではないかと。

同社社大学の場合も女子大学の場合もそうですけれども、分かれてしまえばいろんな問題が起こることは歴然としているわけですね。でもしかたがないから移るのだという発想をもち続けるかぎり真に新しいものは生まれないと思います。

伊藤 そういう発想が現実には広まっていますし。

高山 非常に強いんです。

伊藤 そういうチャンスでもあるときに、なぜこうなるのでしょうか。

高山 関西でたまたまそういう大学がいままでほとんどなかったし、かつて京大が宇治に一部移転をしたあとに戻ったというようなことがありました。その点われわれも新しい大学のあり方というものを十分に考える必要が



竹中正夫氏

あると思いますね。

伊藤　　そういうふうな動機づけを与えることに失敗しているのが現状だから不満が多いわけですね。大学という組織は、多くの組織の中でもいちばん変化が遅いし動きにくいものだろうと思います。他方、たいへん意欲的な先生が個々におられながらも、それがうまく反映されないような不満感が広まっているわけですね。たしかに物事というのはすぐに夢が実現するわけじゃないわけですが、たとえわずかでもそういう方向性が生かされるんだというふうな、チャンネルが開かれることが実感できると好ましいのですが。

### 現実との落差

林　　ちょっと話がずれちゃった形なんです

けども、新しい大学の形というか、理念の問題を考える際に、外発的——外に発するといふのですか——。たとえば作文したような二世紀の大学はこうだとか、あるいは社会の要請の多様化だとか、それに過剰に適応する形で、外から発する形で新しい大学の理念を考えていくと、必ず現実との落差を切実に感ぜざるをえなくなる。それは十何年前に、理念と現実の落差は大きな問題だったと思うのですが、私はいま、とくに語学系の要素の強い教員として教えていて、いちばん自分にとって必要なのは、新しい大学の理念ということもを模索しながらも変わらない部分を見極めることだと思う。いったい大学の教育・研究にとつてどこまでが変わらない部分なのかということ——たとえば語学系の要素の強い教育に限定するというならば、テキストの読み込み、そして学生の知的な好奇心を導き出して方向を与えて、そして彼らの努力を評価するというふうなことだと思うのですが、そうした基礎的な作業がどの範囲まであるのかというところをつかんで、その取り組みをやっているなかでどういう点を改善しなければならぬのかということを考えていく。だからお話し

を逆にもっていくのかもしれないけど、変わらない部分を充実させてやっていけるような最低限の環境は保障していただきたいという感じを、もっているのです。

竹中　　先ほど高野さんのおっしゃった自然科学の領域では基礎的なものを修練しておかなければ話にならないという点と関連してですね。

高野　　先日、工学部の卒業生にどういふことを望むかという報告がありまして、それを見ますと先端技術をこなせるような、研究と開発をする能力、そしてなおかつ基礎学力を持った学生さんをぜひ大学で養成してほしいというような、これは先ほど林先生がおっしゃった非常に外発的な要求ではないかと思うのですね。ところが、そうした要求を実施するためにたとえば建物一つをとってみても非常に狭いわけです。工学部は一括移転を主張しているわけですが、一方では田辺に行つてそういうものがほんとに解消されて、基礎学力をもって創造的な思考能力をそなえた学生さんが本当にできるのかどうかという一つの疑問を、先生方は各自お持ちじゃないかと思うのですね。

それは先ほど伊藤先生がおっしゃったように、一つには物理的な移転というものが前提となっていて帰因しているものと思えます。工学部のように新しい分野が広がっていく、学問領域では今からどうしてもやらなければならぬようなフィールドがどんどんできてくるわけですね。ですから、従来の枠組み、つまりいまの組織体をそのまま物理的に移転しても、そしてその中から何か新しいものが出てくるということはまず期待できないでしょう。もっと別の視点といいますか、別の組織体みたいなものがあって、そういうものが田辺にできますよ、というような議論ができれば、何かおもしろいことが将来期待できるだろうと思うのですが。物理的な移転、それも従来の枠組みのままで移転をしましょうというふうな発想だけで先ほど言いました基礎学力の養成とか、創造的な考えを育成するのに適しているのかどうか、という議論をそのまま置いた形で移転が考えられてきているのじゃないかという感じをもっているんですね。

近藤 大学のほうでは一、二年次ということで限定して考えているわけですね。工学部

は意見としては全体で……。

高野 長期計画として一括でということが前提として考えられています。

#### 「とにかく論」を「えるもの」

竹中 人間の体でいえば胴体をスポンと切つて、一、二年を移す。ですから数量的には文部省のいわゆる中心校地問題に合わせた形になるかもしれない。しかしそれは数量的な形であり、とにかく行けという形で、「とにかく論」になりがちなんです。ですから中期の計画を考える委員会もできてきて、「とにかく論」ではなくて、もう少し内容を、あるいは教育の理念を考えていかななくちゃいかんという意見がかなり強くなってきているのが現状じゃないでしょうか。

近藤 全体移転という場合と、一、二年次を切り離していくという考え方の理念づけがまだまだはつきりしてないと思うのです。たとえば関東と関西の大学の、教養科目、専門科目というふうに分けるといふ問題がさっきありましたけれども、現時点で考えられていることは「とにかく論」となるでしょう。人間の体を半分に分けて、半分は向こう

でやる、あと上半身はこっちでやるというように、非常に矛盾をもったまま進んでいるような気がするのです。それであってはいけないので、もし一、二年次の教育を田辺でするということであれば、それなりの現在の枠組みを外した教育がなされるべきであろうし、もしそれができないとあらば、たとえ長期計画であっても全学がそこで一体となって教育をすることが必要になってくるのじゃないでしょうか。

高野 先ほど私、言い足りなかったと思うのですが、工学部は一、二年で専門科目をかなり置いているわけですね。それが先ほどの基礎力ということの関連なんです。それを一、二年で切ったときにどうなるのだろうかということなんです。つながればいいわけなんです。つまり基礎学力として非常に広範囲なものが社会のニーズとしては求められてきているという現実に対して、田辺で一、二年で切ったときに、どういうふう考えたらいのかという意味で申し上げたのです。

伊藤 法律学科でも同じようなことが出てまして、こんど改革した一つは、三系列の一般教育科目の単位数をもっと減らして、その

分専門科目を取る時間を増やしたほうが意味があるのではないかと工夫です。教養重視か専門重視かは大学教育における永遠の争点だと云われていますが、この場合は、事実上、一般教育科目を減らすというふうなことで出てきています。だからこれが強まると、ちょっといままでの総合大学といえないような面が、どうしても出てくるのじゃないかとも思われます。もうひとつ崩して言えば今日の日本の大学は専修学校的な傾向、あるいは各種学校のな傾向になりつつあるのじゃないかという意見を耳にします。もう短大と各種学校はほとんど差がないですし、四年制の学校なんかもそういうふうな傾向をおびている。これがいいか悪いかよく考えないといけません、現実にはコンピュター講座をつくるとか、英会話講座とか、あるいは経理とか料理とかデザインとか、ああいう各種学校風の講座をつくれれば相当集まるだろうと云われています。

### 基礎科目の課題

近藤 何をもって基礎科目とし、何ををもって専門科目とするかという区別と云われています

か、考え方もずいぶん変わってきましたね。工学部のことは私はよくわかりませんが、いわゆる基礎科目が非常に専門化してくる。専門科目はこういう変化の激しいときですから基礎化されていくというふうな、そういう逆な現象というはあると思うのですね。ですからいわゆる現体制での大学教育の中で、一般教養科目と専門科目とのことがいわれる場合、それにそのまま乗っかって私たちが進んでいいかどうかというふうなことも、十分考えなければいけないと思いますけどね。

高野 私は工学部だからそういうふうにし上げるわけじゃないですが、たとえばニュートンの肩に乗って何かを考える。ニュートンまでの思想を知って、そのニュートンの上になれわれが乗っている、あるいはアインシュタインの上になれわれが乗っているというのが現実だと思うのですが、少なくともそういう過程がどうであったかということ勉強しなければそのつきはわからないわけですね。

ですから、これは言い過ぎになってしまいかもわかりませんが、たとえば同志社の場合

はいま工学部だけが理科学系列の学問になっていますが、そんなユニヴァーシティーなんてありえないわけで、少なくとも理科があと三学部ぐらいあって、理学部もあり、薬学部もあり、医学部もありということが必要です。アメリカなんか医学部がなければ総合大学といわないような傾向があると思うのですけれども。そういう中でベーシックなものも物理であり、化学であり、生物であり、数学でありというのがきちっとしてわかっている場合が多いわけですね。そしてそれらをいかに複合化し、統合化して習得さすかということが基礎教育に対する一つの考え方じゃないかと思うのです。田辺を考えるとそういう視点があるのかどうか一つ問題じゃないかと考えているわけです。

伊藤 そうすると大学教育というのはどの辺までやるか……。おっしゃられるアインシュタインの肩までか、ニュートンの肩までか、ベーシックだけでいいのか、その上のところまでカヴァーしないといけないのか。

高野 いろいろ価値観がありますので一概には申し上げられませんが、狭い範囲の私の

経験から具体的に申しますと、工学部の学生さんで数値的に物が考えられない人が多くなっている。量的に何かをとらえるというか、匠の学問ですから実際に自分で力を出して、具体的に物をつかんで触って、そして人間の生きざまみたいなものをグッと実感的にとらえていくというのが応用学問の特徴じゃないかと思うのですが、それが量的にも質的にも押さえられないという学生さんが増えているわけですね。これが学問の性格からいっても、基礎学力がそういう面では不足しているだろうというふうに見ざるをえないと思うのですね。そういう意味で私は基礎というものを考えたいと思います。むつかしく言えば、たとえば仮説演繹法なり、いろんな自然科学の方法論がきちっと体得できていないところにも問題を感じるので。

伊藤 四年じゃ足りないということでしょうか。工学部の場合は……。

高野 工学部の場合、四年制教育の大きな特徴はゼミにあると思うのですね。三年間の講義による勉強を集約するような形で、総合的にいろんな基礎知識を使って次に必要なことを考えるという意味で、ゼミは一つのトレ

ーニングの手段になっていると思います。少なくともゼミのテーマ研究というものが、基礎を固め、そしてそれを確認をしていくという意味で大きな役割をはたしているし、その壁を学生さんが乗り越えたときに、はじめて四年制の工学部卒業生であるというふうに認定されるのではないのでしょうか。

いま伊藤先生が質問されました。この線が大学教育に求められているかということとは、非常にむつかしい判断ですので十分にはお答えできません。

#### 戦後の矛盾

竹中 いまのお話をうかがって私が感ずるのは、戦後に日本がアメリカの教育方式である六・三・三・四を採って、リベラル・アーツ・カレッジをつくったわけですが、しかし

その実体は学部のタテ割りの壁の強い古い大学の形態をもって内容としてはリベラル・アーツをやりたいという矛盾がうかがいがあっていると思います。旧学部の教授会はちゃんとありますし、そこに人事権がありますし、カリキュラム編成権もありますし、そういうところで、しかしわれわれは総合大学でリベラ

ル・アーツをやるのだというのは矛盾しているように思います。ですからこんど一、二年は移れといったときに、その矛盾が露呈してきている。

伊藤 具体的にいうとリベラル・アーツという場合の内容と形式がたいへん分離していると思うのですね。一般教養だと思ったらマサチューセッツ教育科目なんです。大教室で何百人で授業を聴く。そこでリベラル・アーツの内容が満たされるかという疑問です。教員を三倍くらいに増やして、たとえば語学教室でも三五名以下というふうな小クラスでやっていけば充実するでしょうけども、いまのような形ですと、あまりにも形式と内容が離れすぎているのじゃないでしょうか。

高山 高野先生に質問したいのですが、いまお話が出ていますように、戦後の大学改革でいちおうアメリカの大学を下敷きに置きながら、現実的には学部制度、すなわち学生も学部にも所属するというのは厳然と残してきたわけですね。人文分野の場合は、いまおっしゃっているような基礎と専門というのは、いちおう文学ですと語学力が基礎でと言えても、それは非常に連続したものだと思うので

す。私が質問したいのは、リベラル・アーツを主軸として学部制によって学生をしぼらないアメリカの大学の場合と比べて、たとえば先生のご専門の工学部の学部四年間の学生の専門的能力といえますか、レヴェルといえますか、日本のほうが高いですか。

高野 私も一年ちょっとアメリカに留学をしておりますので、そのときの感じではないのですが、卒業年次での力はそれほど変わらないだろうと私は思いますね。ただ大学院教育に関しては、最近は大大学院博士課程の前期課程を出ている学生さんに対して、専門家であるという一つのステータスを与えていることになりましたが、そういうふうな比較で見ますと、大学院教育の充実の程度という点でかなり格差があるだろうと考えます。つまり結論から言いますと、少なくとも同志社での大学院教育は、まあ比較するとぐあい悪いですけど、アメリカの大学院の課程を持っている大学に比べますと、非常に貧弱ではないかというふうに思っております。そのことが専門領域の学問的な水準なりを考えましたときに、やはり直接的にそういう要因として効いているのじゃないかと思えます。

竹中 それは工学部だけの問題じゃなくて、全体的にいえますね。大学の四年生の教育をしていくだけでわれわれは手いっぱい、グラデュエイト・コースあるいはプロフェッショナル・エデュケーションを専門に三年ぐらいほんとはやるべきで、それにはなかなかわれわれは手が回っておらんというのが現状ではないでしょうか。しかし日本ではもう一つの特事情は、卒業生を採用する企業が、そこからのプロフェッショナル・トレーニングは自分たちです。会社で訓練するんだ、リベラル・アーツの教養を持って基礎がある人、われわれは要求するんだと、こういう点がありあ日本は強くて、アメリカはビジネスマンになるのだったら、やはりアドミニストレーションやビジネスのスクールに行くとかして企業に行くというのが多いわけですが、日本では大学院に行くとか企業のほうでは採りにくいというふうな傾向があるでしょうか。工学部では大学院を出た人もかなり求める要素がありますでしょうか。

高野 学部の場合ですと、あまり極端な専門を考えずに企業は採用する。もちろんある程度専門を考えて採りますけれども、電気の

人が採用できなければ機械とか化学の人を採るといふふうな工学部としての採り方をしてくれます。しかし大学院になりますと専門的な知識を持っているということと前提に採っていくということが採用の条件としてありますので有利です。しかし、それは社会の状況なりがアメリカの場合と日本の場合とだいぶ違うように思いますので、一概に比較できないかと思えます。

#### 総合科目はどうなる

竹中 林さんは英文学をご専門にしていらっしゃるのですが、一般教養でも教えていらっしゃるのですか。

林 ええ。語学のクラスと、それから総合科目はこの五年ほど……。

竹中 一、二年が田辺にということになると、語学や総合科目などは充実するほうに行くでしょうか。そういう点で考えるべきことはいろいろあるのじゃないでしょうか。

林 総合科目については、いまいけば微妙な問題というか、下手すれば二拠点化することによって出てくるさまざまな支障を、ある程度制度的に受け皿にするような形になり

かねない。というのは二、三年次に総合科目はまたがっていますから……。

竹中 いま一年生は取れないわけですね。

林 取れません。七二年ですか、この科目ができたのは、十年以上経過しているわけです。当時いろんな意味での一般教養と専門との間の制度的な改革をやるうとして、ちょうどその結論を出すべき十年というスパンが経過したわけですから、田辺を考えるとときに、具体的に目に見える形でたたき台になるものとしては総合科目がいちばんわれわれの身近にある例だと思うのです。

ですけれど総合科目的な、いわゆるゼネラル・エデュケーションですね、それをデヴィッド・リースマンが一般教育運動というふうな名前で呼んでいます。つまりムーブメントだということは、結局制度化されたときに生命を失っていくのだというふうなことを言っているのですが、確かに総合科目を教えさしていただいで、非常にむづかしい問題があると思うのです。学生の側でつねに個別に各専門の先生が論じられた問題を総合していくような能力の下地ができていかないかぎり、これは総合には向かっていかないわけですね。い

まの学生はカタログ的な知識の摂取のしかたが好きですから、個別的な特殊な問題になればなるほど彼らは敏感には反応しますけれども、はたしてそれが総合されるかというところ常にもとない感じがしているのです。そこらになにか五年間総合科目を教えさせていただいて、僕自身不安をもっているということがあるのです。

竹中 総合科目を総合的にうけとめる学生の問題もあるでしょう。しかしぼくはだいたいだと思うのは、総合科目をつくられたときに三つの柱をつくったということです。一つは京都の自然と歴史というような地域研究ですね。さっきの京都という所に同志社が置かれているのでということ。もう一つは同志社の立学の精神ということで、同志社とキリスト教とか、近代日本における同志社とかいうのをめぐって、同志社の伝統・歴史を知るということ、三つ目には社会の公害の問題とか言語とか、いろいろ現実に関わっている問題をやる。そのテーマの選び方は、同志社で学んだ教養人をつくる一つの視点がそこにあるような感じがしますね。一、二年の学生が田辺に移った場合に、そういう同志社の個性を生

かしたりペナル・アーツの教育をなすことが必要なんじゃないかなと思うのですけれどもね。

#### 柔軟体操の出来るシステム

伊藤 クイズのような入試問題を解いて大學生になりますでしょう。その頭を大学向きの頭に切りかえる柔軟体操を一、二年のときに早目にしないといけないと思うのです。

竹中 いまのところは柔軟体操をする前に、のほろずになってしまふのですね。

伊藤 それで案外単位をもらえるから、三年、四年になるほど試験を甘くみるみたいで……。

竹中 それでは卒業するための最低の単位をそろえることになってしまい、自分で勉強していくような人間をつくるのができない。

伊藤 詰め込みではなくて柔軟体操ですね。そのへんのシステムをつくれませんでしょうか。それをするには学生と教員の比率をもう少し改善して……。

近藤 一般教育科目で宗教学を私は一年担当しておりますが、出席を取らないとだん

だん減ってきて、最後は五十人ぐらいになり  
ますかね。それでやりやすいなあと思ってい  
ると、最後の試験になりますと教室会場が  
えられて三百人ぐらいになる。うわーと思  
って、こんな大きなクラスは持ったことがな  
いという、ほかの先生は七百人も八百人も  
というふうなことを聞くにつけ、このままの  
体制を田辺にもって行って、さあ一般教科  
目だと、そこをまあ、やってきなさい、専門  
は今出川にまかせておけというような形です  
と、発展も飛躍もそこにはありえないと思  
うのですね。

私は最初、官立の大学で学びましたが、先  
輩たちの教えてくれるのは一、二年の一般を  
どれほどサボって楽をして、三、四年の専門  
科目に挑戦するかというふうなことでした。  
それは官立大学のほんとに悪いところであっ  
たと思うのですけれども、さてそれなら私立  
の同志社で、新島先生がそれに対抗して官学  
に対する私学というものをつくり出した理念  
あるいは理想が、どういうふうに生かされて  
いくのかということだと思ふのですね。いろ  
んな大学で情報交換をするときがあるのです  
けれども、たとえば一年生に対しては十五人

ごとのクラスをつくって、その大学の教員全  
体が専門科目を問わないでその十五人グルー  
プを世話する。世話するというのはおかし  
いですけれども、そういう少人数のケアをする  
ようなクラスをつくっていくというような大  
学があるのですが、何か一つポイントにな  
るような試みは、この際考えてしかるべきじ  
やないかなと思ふのですがね。

竹中 ぼくもそう思いますな。そういうポ  
イントづくりなしに行くならば、ただ移った  
という「とにかく論」になってしまう。

伊藤 一、二年の段階からレポートを書か  
せて、それを添削して見ることが出来る程度  
の教室のサイズがあって、そういうのを一科  
目について二本とか三本とか書くようなこと  
でもやれば相当伸びると思ふのですけれど  
も。教師一人でたくさん教えれば経済効率  
はあがりませけれども、それでは教育効率とし  
てはいけない……。

#### アイディアを出しあう場の設定

近藤 そういうことを考えたり、ディスカ  
ッションしたりする場所は、教授会とか、こ  
ういう懇話会みたいなものでもいいでしょ

けれども、あるのでしょうか。

伊藤 個々にはいろいろとアイディアを出  
し合うわけですけども、なにかそれが実にな  
らない。初めから、ならないだろうというこ  
とを予想してしか言えないみたいなの……。

近藤 同志社のいいところは、個々の発言  
がかなりばらばらなものであっても、どこか  
で吸収されていくようなところがあるのだと  
思ふんです。私なんか外に出て同志社を見  
ますと、いろんな悪いところが見えてきて同  
志社に対しては批判的になるのですけれど  
も、しかし同志社が嫌いかというと、そうじ  
やないのですね。やはり何となく愛着がある  
し、それはいいたい、どういふところなの  
なあ、という感じがするのですね。何が同志  
社に私を向けていくのかということを考え  
たら、やはりいろんな批判があるんだけれど  
も、その批判に耐えることのできる何かがあ  
るからそうなのでしょう。

伊藤 上に立った人が、下の意見を気にし  
ている点は前期型民本主義の側面でしょう  
か。たしかに独裁制ではないが、しかし民主  
制でもない……。

竹中 タイミングからいうと、田辺校地を

同志社は早くから取得しながら、六〇〇七〇年代前後の状況がありまして、それを語るような状況ではなかったことがかなり続いて、ここ数年で田辺ということが禁句ではなくなつた。ようやくいろんな意見が出はじめたところで、公約もあるものだから実施計画の方向に、「とにかく論」で行きつつあるというのが現状だと思うのですね。しかし、インステイテュションというのは、けっして理想的な状況で大きな決断はなかなかないと思うのです。新島が京都に同志社英学校をつつたときでも決して煮詰ってからの決定ではなかったと思います。その現状を批判的に受けとめながら、だいたいなことは、どうせ移るならこうすべきじゃないか、こういうことも可能だということを、粘り強くみんなが思うことを語り、責任の場にある人たちが役職の方がたはそれができるだけ聴いていく。最後はどこまでかみ合うかということではないでしょう。か。硬直した形式論ではなく柔軟性をもって進めていくべきじゃないかと思えますね。たしかに近藤さんがおっしゃるように、そういう場の設定も多様にしていく必要はあるでしょう。

伊藤 話交りますが法学部から見ても、文学部、工学部がうらやましいのが、三年、四年のときに少人数クラスが中心になります。そして。法・経・商の場合は一般教育科目的なクラスがずうっと続いて、小クラスはわずかに三年、四年の演習と、あと外国語講読くらいしかありません。そのへんをもう少し充実できないかなと思うわけですけどね。

竹中 私が勉強したイェール大学を例にとると、一年生のときには古いキャンパスに入れるのですね。オールド・キャンパスという蔦が生えてアイヴィー・リーグの匂いのする古い所です。端っこにチャペルがあつて、宗教センターが真ん中にあり、ハークネス・タワーがあるという、そういう古い環境に入れて、その一年間にイェール大学の歴史とか、ニューイングランドのピューリタニズムとかを、語学や数学などの基礎科目とともに習得する。そのときに先生たちはわりあいにおおぜいの学生に講義はするのですけれども、しかしチューターがついて、大学院の学生がいつしよに住み込んで、チュートリアル・グループができてよく指導しますね。

伊藤 法・経・商の場合ですと、チュート

リアル・グループにあたるところはゼミを除けばクラブであり、サークルとなっているんじゃないでしょうかね。

#### 教員同志の横のつながり

高野 さきほど竹中先生のご指摘でも申しあげたのは、ユニヴァーシティといえども学部のタテ割りの社会の寄せ集めである。一般教育の問題を私は語る資格はないけれども、リベラル・アーツを考えると横のつながりが欠落している。あるいはそういう組織体自体がないにひとしい。そしてそれが欠落しているために問題が発生していると思います。これから二拠点になるわけですね。その二拠点を考えるときに、そこでおきる問題をどういうふうに解消していくかということが次の問題として思うのですね。

竹中 それがいじですね。

高野 ですからそういうことを考えるときに、なにか教員同志の横の連帯なりができていかわゆる総合的な視点が共通の認識として出てきたときに、その一、二年あるいは二拠点というものを考える一つの契機になるものが

あるように漠然とは考えるのですが、そのへんどういふふうに考えたらよろしいでしょうか。

たとえば自然系なり工学部なりのものを考えますと、教育と研究とがありますけれども、研究なんかですといろんなトピックスがある。セミナーをやるというときには、欧米ですとたくさんの方がワッと集まりますね。

同志社だと非常に狭いところですか人間が集まらないというふうなことがあろうかと思うのですね。つまり教員同士の横の連帯なりが非常に稀薄であって、それは学問の性格をそのまま出しているような感じを受けるのですが、そういうことをある程度打破していったら、こういう座談会なんかはそういう意味でおもしろいとは思うのですけれども、教員の組織構成は具体的に設定できるものなのかどうか。同志社自体、歴史的にそのような可能性を持っているのかどうか疑問ですね。そのへんが先ほどの総合科目の問題、それから専門というものをいまの四年制の教育のなかでどう考えていくか、あるいは一般教育をどう考えていくかという視点を考えるのに重要ではないかと思うのですがね。

伊藤 総合科目なんかあまりテーマを固定させずに、三年先くらいを見てこういうテーマでどうかとあって、それをやりたい人を自然系からも人文系からも社会系からも集めて研究会でもして、その成果が授業になるようなことでもあるとおもしろいと思えますけどね。

キャンパスの二拠点というのでも、物理的に一拠点にするにはどちらも狭すぎるのじゃないのですか。可能なんじゃないか。

竹中 田辺のほうを拠点にすることは、サイズからいったら可能じゃないですか。しかし今出川のこの場所は聖地ですから愛着は強いでしょう。

伊藤 京都の中心を放すのは惜しい気もしますね。東京でも全学移転したために評価が落ちたとか、逆に都心に再開発的に進出する大学もありますね。田辺と今出川ははるかに距離が近いですから、青山学院みたいに厚木と渋谷ですか、あんなに不便じゃないと思いますけど、二・二で割れないで、三・一とかいう形でキャンパスを使い分けるみたいなことも将来起こり得るかもしれないという気もしますけれども。

竹中 将来どういう形になるかわからないけれども、いまのところはさしあたり一、二年は行くのだけれども、工学部のケースもあるし、また場合によっては新しい学部をつくるということも、あれだけの土地を持っているのですから当然考えるべきで、どういう学部がいいか、どういうことが可能であるかも考えていくべきだと思います。

いちばん初めに高山先生がおっしゃったようなことも、いまの点に関係していると思うのですが、もう少し補足なりしていただいたらいかがでしょうか。

#### 女子大の場合

高山 女子大の問題もいろいろあるのですが、総合科目のことが出ていましたけれども、われわれのほうでもそういう話はいろいろしてきたんですが、現在のように研究者の側で学際的な研究体制が十分にできあがらないままに、総合されない形で継ぎはぎの総合科目を提供してもあまり意味がない。かえって学生は混乱をするのではないか。いまアメリ研とか人文研とかいう組織化された学際研究の研究所がありますけれども、もう少し自由

な形で学際研究といえますか、学部の枠を超えた研究ができる場がほしいですね。女子大学のほうでも研究所が中心となっていくつかの共同研究プロジェクトが行われており家政、英文、一般とかなり入り乱れてやっている。いろいろ難しい問題もあるようですが、何か今までになかった新しい成果が生まれつつあるように思います。

ですからアメ研に所属するとか、人文研に所属するという形はそれなりに存在意義はありえても、もう少し別な形での、総合科目に属するようになるような教員の研究体制を可能にするような施設なり制度なりを、田辺移転を契機につくりあげたいと思います。

竹中 そういうニーズを認めて確認しておくということはどうですか。

高山 それから竹中先生がおっしゃっていただいたかに国際化ということがございましたけれども、女子大では先生方ご存じのように短期大学を六一年度に開設すべく準備しているわけですが、これはいままでも何のカリキュラムもないところにやろうというわけですから、わりに自由な発想でやれる。もちろん、いろんな条件がございます。英米語学科とも

う一つ日本語日本文学科を予定しています。これもちょっと変わった名前というか、普通は国文学、国語学なんです。従来あくまでも日本という枠の中で国語としてやってたわけですが、それがイギリス文学もあれば日本文学もあるという、世界の中の文学あるいは語学の一つであるという考えにたつてやっています。もちろん教員組織とかいろいろむづかしい問題があります。けれども、そういう考え方でやっているのです。

そういうことを考えた場合に、私は移転までできるだけ積極的に生かしていくべきだと思います。京都は京都なりにいいところがあったも、田辺が京都と奈良という二つの近畿文化圏の楕円形の焦点のような位置にあるということとは十分生かせると思いますし、ぼつぼつ同志社大学のほうも女子大も留学生たちが来ていますし、こんど短期大学のほうでは両学科に日本語教授法、それから日英語比較などの科目もにおいて、国際化への一助としたいと思います。

#### 相互交流の要請

高野 私もそういう領域を超えた一つの問題というのはたいせつだと思つのですが、たとえばそういうときの宿泊施設であるとか、セミナー・ハウスが確保されているかどうか。学内でセミナーをやるかと思つますと、会場を確保するだけでも大変なことになっているわけなんです。やはり建物としてお考えをいただくことが、共同研究なり外国から来られた方を京都らしくおもてなしをするという意味でもたいせつなことじゃないかと思つます。また留学生に対する宿泊施設なども、国際化を考えるとき大切ではないでしょうか。これは投資効率的とかで、判断できない問題ですが、施設面でそういうものを考慮していただくことがだいじではないかと思つていますね。

高山 工学部なんか、私は詳しいことはよく知りませんが、学研都市にいろいろな研究所なんかはかなり行くようなことになれば事情も変わってくるのじゃないか。

高野 ちょっと予想はできませんけれどもたとえば筑波が一つの前例になるかと思うのですが、筑波は私も学会で見学させていただきましたけれども、それもタテ割り社会でし

て、通産省所轄であるか文部省所轄であるかというようにことで、組織体としての交流はあまりないように聞いております。ですから日本のタテ社会の物理的な例が、やはりそういう場所においても、見られるわけですね。

(笑)

高山 一見総合されているようで、実は壁は厚いという……。

近藤 なかなかそういう壁というのは破れませんですね。そういう問題もそうでしょけれども、たとえば女子大学と大学とが田辺に行っても隣接するわけですが、女子大学の個性と、共学の個性性というのは依然として道路一つ隔てただけでそのまま移行する。多少の交流はありますけれども、もう少し内容的に交流できるような場所なり、あるいは内容的な交渉ができないだろうかと思えますね。

伊藤 学生が単位を取る場合でも、お互いに取りに行けるといふようなことはやってもいいんじゃないでしょうかね。

高山 私が以前図書館に関係してましたときに、同志社大学の図書館の方ともいろいろ話をして、たとえば定期刊行物でも同じものを神学部で取り、文学部で取り、女子大で

も購入しているが、同志社の定期刊行物センターみたいなので総合すれば、それだけ充実するじゃないかということをかかなり言いましたが、皆さん理想論としてはなるほど、なるほどと、おっしゃるのですが、現実にはそれぞれの壁があつくて駄目だということでした。でもやろうと思えば、これほど情報科学なんかが発達しているわけですから、簡単にできると思うのですが……。

伊藤 光塩館では、経済学部と法学部の雑誌を調整しまして全部一冊にしました。それから購入する書籍もダブらないようにしています。研究室棟ができた機会に法経の間ではうまく話がまとまったわけです。

高山 この変革期にそういうものが同志社全体としてできれば、ずいぶんプラスになる面はあると思うのですけどね。

竹中 収納していくことも考えたら、たいへんスペースが要りますから。

伊藤 光塩館を建てるとき皆で見学したのですが慶応の研究室棟には五学部の研究室が一つの建物にあって、図書を共通で購入して非常に効率的にやっていますね。

## 国際化の潮流に就いて

高野 田辺との二拠点というのが、こだわらうようですけど、教育と研究が分離してしまうような感じがするのですよ。つまり田辺は教育機関で、研究室は今出川だと。大多数の先生方は、そう言えば失礼ですけどもむしろ自分は研究者だと思っている方が多いと思うのですが、田辺にそういうシステムなり施設ができて、じゃ田辺に行つて、共通の問題をまったく違う分野の人たちと話し合いますよというふうな気運ができれば、研究という意味でのメリットが出てくるように思えますね。ですけどいまのビジョンはそういうところがなくて、二拠点というのが永遠に教育と研究の場を完全に分離し、ひいては大学が本来持つべき教育と研究の両立性というものを崩していくのじゃないかという危惧をもっているのですね。もつと悪い言い方をしますと、先生方はただ田辺に講義をしに行く。あくまでも今出川に本拠地がありますよ、というふうなイメージをもたれると思うのです。少なくとも田辺において、夢かもわかりませんが、従来の枠に収まらないような新しいも

のをそちらのほうで少しずつ形成をしていく。そういう事実を重ねていくということがだいいじやないかと思えます。その一つとして、国際化なんていうのは非常に共通な問題として、皆さんご関心があるかと思えますけれども。

伊藤 先ほど高山先生がおっしゃられた日本語教授法なんか、一つの新しい面ですね。

高山 何とかうまくいけばいいのですが、担当者の点などでいろいろむづかしい面がございますまして、ずいぶん苦勞しているわけですね。

伊藤 国際高校もあるわけでしょう。せっかくの英語力なり外国語力を、あまり日本化させて風化させないで、それをうまく伸ばさせながら生かす道というのではないのでしょうか。

竹中 これからの国際人は、語学ができてむこうの国のことを理解するだけではなくて、自分の国のことをむこうの人に要領よくわかる言葉で話す。そういう自分の国の文化を理解した人でないといかんと思えます。その点では日本の文化あるいは歴史を理解することが、国際教育の一環としてほしいです。

うな。

林 英文科の場合、国際高校の出身者もかなり数おられますし、学生の国際化——国際性じゃなくて国際化というのは大学のオフアードできる教育を超えて知識の量では非常に増大していますよね。外国旅行するのも多いし、だけでもそれが国際化であっても、国際性には結びついていかない。なにか情報量ばかり増えて結びついていかない感じがします。むしろ文化の異質性に敏感にならせることが必要だと思う。

竹中 未来のことはわかりませんが、このままていくと日本に外国の人がますますたくさん来ると思えますね。というのは日本は高度の科学、技術をもって、そして伝統的文化をもって、かなり多様性を受け入れるところですから、外国の人びとがやって来ると思えます。いわゆる観光もありますけれども、もうちょっと落ちついて勉強したいという傾向が出てきています。そういうときにはやはり大学がだいいじな役割を果たすのじゃないかと思えます。四年とは言えないが、半年なり一年で何かのクレジットをもって帰って、そして自分の専門のことをやる。短期とって

も三四四日じゃなくて、ワンセメスターぐらいの研究を自由にして帰りたい。また日本人もむこうに出かけて行って、一年なり半年なりいて帰ってくる。そうすると、やはり京都というのはずごくアトラクティブな場所だと思えますね。そういう点から、せっかくああいう田辺という場所を持ったら、そういう受け皿を同社社は考えていくべきじゃないか。いまは多少先行投資みたいになるけど、同社の内側の者だけじゃなくて、日本全体からいってもだいいじなことじゃないかと思えますな。

伊藤 A K P の学生が、普通の演習とかクラスなんかにも入って聴くというふうなことはやっているのでしょうか。

竹中 林先生はA K P も関係していらっしやいますか。

林 いえ、しておりませんけども、見てましたら、キャンパスの中で学生単位の交流は多いみたいです。それは非常に自然です。

高野 同志社の国際交流では、そういう人と人とのつながりによるものが大きいように思えます。しかし別の見方をしますと極端な話だと、国連の本部みたいな重要な機関があ

れば必然的に国際交流が起こりえますし、少なくともそういうチャンスがあると思うのです。先ほどの議論でもありましたように、ソフトウェア的な人と人との個人的なつながりがだいじだと基本的には思うのですが、それをサポートするための機関なり組織があることが大切です。

ですから先ほどの国際化というような意味でも、同志社がそれを先駆的に何らかの形でできることがあると思います。たとえばAKPのプログラムをサポートしているわけですから、そういうことを基礎として次の事態にできないはずがないだろうと思いますので、ぜひそのへんを考えていただければと思いますね。

近藤 私が同志社へのいろんな批判は自分のうちにあるけれども好きだと申し上げたのは、そういういろんな可能性を、長い伝統をもちながら、門戸をまだ開いているというようになところが魅力じゃないかと思うのです。懐が深いというか、ある形にはまってしまわないバンカラさといえますか、破れかぶれなところが同志社にはあって、それを許容していくだけの度量がいい意味では残っている

し、またそれを残していかなくちゃいけないのではないか。国際性という問題もそうだろうと思うし、その度量の広さはいい意味での同志社の伝統だと思うのですね。一つの狭隘な意味での宗教的な枠組みの中にすべてを閉じ込めてしまうのではなくて、文学、科学、神学といろんな範囲のものを広く受け入れて切磋琢磨するよさというものは、やはり同志社の魅力だと思うので、それを何とか生かして先行的に何か一つを打ち出していくというようなものがあつたら、ほんとにいいなと思いますね。それを失っていったら、普通の学校になってしまうのではないかなと思いますね。

#### 同志社の個性を生かして

高山 多様性というのは国際化とも関係するわけで、ご存じのように女子大では新しい推薦制度ということで、同じ基準で全学生を選ぶのじゃなくてちがった価値基準をとりいれて、キリスト教学校同盟に所属している学校からクリスチャンの学生を入れる、それから指定校、そしてこれは同志社では最初だと思うのですけれども、同志社ファミリーの枠

をとる。それから現在大学院には新島基金で中国から留学生が来ていて、私も教師として新しい経験をしています。また国際高校からの学生もふえてきましたが、この場合もわれわれの側に新しい対応が必要だと痛感しています。

多様な価値基準で学生を採っていくというのは、すばらしいことだと思つたのです。ところが実際教えていますと、教える側の価値基準を今までと同じものに固定しては駄目だということに気がきます。違った価値基準で入れながら、こちらはやはりこれだけのことは知ってなければいかんという気がある。考えてみれば欧米の大学ではそれぞれの学生に対応できるもつとも柔軟な体制をもつていようように理解しているのですが、これで卒業なんだという基準はもつと多様であつていいと思います。いくつかの種類の入試をやるという大学が最近ふえてきたようですが、受け入れたあとの教育のあり方を十分に考える必要があると思います。やはり違った学生が入ってくると思うのです。しかし入ってみれば同じで、これは私、国際高校の出身者でとくに感じるのですが、国際高校の出身者が違っ

たレヴェルで入ってきて、それを日本の高校でやったものと同じようにあてはめていくというのは、やはり無理が出てきますから。

伊藤 そうですね。なにかよい点を殺してしまうことも多いでしょう。

高山 そのところを私自身の問題として痛切に感じています。こういうのを移転と結びつけるのはおかしいですけど、なにかこの変革を遂げる際にそういうものをひっくり返して考える必要があるのではないのでしょうか。

竹中 しかし、それが世界の傾向だと思えますね。たとえばヨーロッパの大学の先生にすれば、スイスで教えていて、自分の国の伝統と文化と言葉をもった学生よりも、そうじゃない学生たとえば、ドイツやフランスそしてイタリアから来ている学生たちを多く教えているというのがチューリッヒの大学の先生でも、ずいぶん多様化した学生を引き受けています。

しかし、そういう問題もあるわけですけど、やはり同志社に來たい人を入れて訓練するようにしないといけない。このあいだも図書館長の畑先生が私学白書の紹介で書いておられたけれども、同志社だけじゃありません。

んけど、しかたがないから私学に入ったという滑りどめでですね、そのほうがほんとに行きたかったという人より三%ぐらい多いのですね。同志社も超一流とは言えないがかなり充実してきて評価を受けてますから、ほんとに同志社に來たい学生を受けて、そしてそれを訓練するという方向を打ち出すべきでしょう。

伊藤 同志社へ行くところということができないという、個性をもっている大学にしたいかないと、これから大手私学は熾烈な競争をしていく時代になると思いますけども。

竹中 いま十八歳の年齢層が多くなっているのが、ここ七、八年したら下るわけですね。それからほんとうの競争が始まるのではなく、いま量的な校地問題を考えると共に質的な内容充実の問題を考えると共に質ましよう。一年で田辺に來たときに、ああ、これはうっかりしておれん、大変な所に來たぞというようなチャレンジを受けるような教育はどうしたらできるかということですね。ほくはいまのままでいくと一、二年空洞化して今出川に來る。今出川に來たら使いのものならんという心配がありますね。

伊藤 一方で勉強させないといけない、一方ではやはりのびのびさせないといけないという両方があるのですけれども……。

竹中 先ほどおっしゃったサファリですか田辺はそういう形になるのにはかっこうの所で、自然にのびのびするかもしれない。

伊藤 野放図でも困るのですが……。慶応に入った学生とこのあいだちょっと接触があったわけですが、「慶応はむづかしい学校だから一年生といってもおちおちできません」と困難イメージをオリエンテーションでたき込まれているのです。これがガリ勉の継続になつては問題ですが、頭の柔軟体操の場であってほしいですね。大学は。

竹中 よく外国の人に聞かれるのです。おまえはユニヴァーシティーにいるそうだが、どこで総合性か。組合をやるとほかの学部の人に会う。それから私はテニスをやる。テニスをやると合宿を教職員の人たち、幼稚園の先生までいっしょにやりますから、これは親しくなります。もう一つは入試をやると、私は去年幹事長をやりましたが、これも親しくなりますね。学問のほうでは、総合研究を人文研でやって、伊藤さんなんかとそれで親し

くなくなった。それと総合科目ですね。こんなことをやらなかったら、ほんとに単一になっちゃいますね。

だから先ほどおっしゃったような、田辺に移ることを通していろいろプロセスはあるんだけれども、そういうところで総合化ができるような移り方と内容と、それから器ですね。そういうものをつくるのが一つのビジョンじゃないでしょうかね。すぐにはできませんけれども、そういうものをやはり築いていく。

それから国際化の時代において、同社もそういう伝統をもっている。新島自身、外国に行って十年学んできた国際人ですから、そういう視野をもった人間をつくるにはどうしたらいいかということ。

それといちばん初めにおっしゃったように基礎的な思考能力と学問とを身につける。一般教養に入ってきたときにその努力目標をはっきり出して、あとは自由にひとつやってみてくれという、そんなところが今回たびたび出てきた問題のように思います。

高野 イメージとして各個にいろいろ思っていることは確かなんですけれども、組織体

としてある決断をしていく場合は、一つ一つ経過事実を判断をして、そして積み重ねていただきたいと思うのですね。それは非常にいいことですからもう少ししっかりとやっていただきたいですね。

竹中 つまり、生産的な論議の積み重ねをしてほしい、それはいいことですね。それは古い同社の人たちは、身にしみて感じていると思いますね。いろんな委員会や研究会——同社はどうあるべきかということについての研究会があったりして、相当な調査や研究をするわけですね。そして答申するわけです。しかしそれが実らなかったケースが多いわけですね。そうするとみんないっても仕方がないというようなところがね。そうなのじゃないかと思えますね。

それではこれで終えたいと思います。長時間ありがとうございました。

(一九八四年七月二四日収録、於有終館担当理事室)

